

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
共同プロジェクト研究
2024 年度研究【経過】成果】報告書

研究代表者	所属部局・職名		氏名	
	法学部・教授 / ESD 研究所所長		河村 賢治	
研究課題	地域創生拠点における SDGs・脱炭素実施状況の調査と提言			
研究組織 (研究代表者・ 研究分担者) 2025 年 3 月現在	所属研究機関・部局・職名		氏名	
	法学部・教授 / ESD 研究所所長		河村 賢治	
	文学部・特別専任教授 / ESD 研究所副所長		上田 信	
	観光学部・教授 / ESD 研究所運営委員		橋本 俊哉	
	社会学部・教授 / ESD 研究所運営委員		関 礼子	
	文学部・教授 / ESD 研究所運営委員		河野 哲也	
	コミュニティ福祉学部・教授 / ESD 研究所運営委員		空閑 厚樹	
	スポーツウエルネス学部・准教授 / ESD 研究所運営委員		奇二 正彦	
立教大学・名誉教授 / ESD 研究所運営委員		阿部 治		
全研究期間	2023 年度 ~ 2025 年度			
研究経費※ (上段: 支出金額)	2023 年度	2024 年度	2025 年度	総計
	1,642,000	1,586,020	0	3,228,020
(下段: 採択金額)	2,071,000	2,290,000	1,238,000	5,599,000
	円	円	円	円

※1 円単位で記入

研究の概要 (200~300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)
当該研究の研究目的を含むこと。 【以下、報告書全体について】他の研究分野の委員が評価することも想定し、わかりやすく記載すること。
国連が 2030 年をゴールとする 2030 Agenda for Sustainable Development を提示してからまもなく 10 年となり、その進捗状況を検証し、残りの期間でゴールに向けてどのように活動を展開するか検討すべき時期にさしかかっている。また、日本が掲げている 2050 年カーボンニュートラル達成に向けて力を合わせる必要もある。こうした動きを後押しすべく、大学と地域が連携を深め、地域における脱炭素化をはじめとする各種課題の実態を調査し、提言を行い、あわせて地域経済の活性化や災害に強い地域づくりの道程を検討する。その際には、様々な学問分野の知見が必要になると考えられるため、本プロジェクトには各自それぞれの専門性を備えつつ ESD の研究・実践に共通関心を持つ研究者が結集している。本プロジェクトでは、ESD 研究所が覚書を交わしている 6 自治体その他の地域をフィールドとして、現地調査を踏まえて研究を展開する。地域が直面している課題を、地元住民とともに発見し、理論⇒調査⇒研究⇒実践⇒理論の見直し…というサイクルを確立し、その基礎の上で大型の外部資金の獲得を目指す。
キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)
[地域創生] [SDGs] [ESD]

研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
- ・何をもって研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。
- ・どのような点において、当該研究分野の学術研究推進の高度化に寄与できたのか。

本プロジェクトの研究活動は、大きく二つに分かれる。第1に、本プロジェクトの趣旨を踏まえつつ、各メンバーがそれぞれ地域と連携しながら行う活動と、第2に、メンバー全員が一体となって実施する活動である。

第1の研究活動では、それぞれの地域における様々な課題や取り組みを視察し、各メンバーが持つ専門性や技能を活用しつつ、地域における対話や協働を支援したり、他地域への応用可能性の考察などを行っている。第2の研究活動では、第1の研究活動で得られた成果をメンバーで共有し検討を行うことによって、地域における環境・社会・経済課題の同時解決を図りつつウェルビーイングな暮らしを実現していくための理論ないし要素を抽出し、「学び」に重きを置くESD研究所らしい地域創生モデルを創り上げようと試みている。そして、今年度は実践できなかったが、第2の研究活動で得られた成果を、再び第1の研究活動で実践し、創出したモデルの妥当性を検証・改善していくというサイクルを回していくことになる。

以下は今年度の研究活動の概要である。

第1の研究活動

●河野哲也

- ・宮城県気仙沼市(2024年6月15日~16日)

気仙沼での地域発見活動：気仙沼市の中央公民館、リアスアーク美術館、気仙沼図書館において、地域の自然と文化についての哲学対話を行った。

- ・新潟県南魚沼市池田記念美術館(2024年10月25日~27日)

池田記念美術館における環境とアートとの関係についての哲学対話の実践：当該地域の小中高校生から大人までと美術作家とが南魚沼市の自然とインスタレーション、アート(八色の森美術展)について哲学対話を企画し、ファシリテーターを務めた。

●奇二正彦

- ・岩手県釜石市三陸駒舎(2024年11月24日~26日)

三陸駒舎におけるホースセラピー視察 三陸駒舎(岩手県釜石市)において、ホースセラピーの実践内容、地域との連携状況、持続可能な社会構築への貢献について視察を行った。具体的には、引き馬(リーディング)や乗馬体験を通じたセラピーの実践、児童発達支援・放課後等デイサービスの観察とヒアリング、地域住民との交流、古民家(南部曲り家)での宿泊体験、施設代表者へのインタビューを実施した。本視察を通じて、馬との相互作用を活かした心理的ケアや、震災後の地域再生におけるホースセラピーの可能性を考察した。

●橋本俊哉

- ・岩手県宮古市現地調査(2024年7月19日~21日)

現地の調査パートナーである宮古市観光課、宮古市三陸ジオパーク推進協議会らと協働で黒森神社へのエコウォークイベントの実施支援を行い、そのコース改善提案とマップ作成等を行うことで、宮古市の歴史・文化・自然の理解を促す仕組みづくりの検討を進めた。

- ・岩手県宮古市現地調査(2025年3月10日~12日)

田野畑村、岩泉町の東日本大震災伝承施設の現状を視察し、宮古市田老地区で行われた14周年の追悼記念行事に参加した。また、宮古市観光課、宮古市三陸ジオパーク推進協議会らと打ち合わせを行い、今年度の活動の総括と、来年度の持続可能な地域振興の在り方に向けた活動方針の確認を行った。

研究【経過・成果】の概要 (つづき)

●空閑厚樹

- ・鳥取県鳥取市調査 (2024 年 9 月 17 日~19 日)

空閑が鳥取市を訪問し、鳥取県の SDGs に向けての取り組み (脱炭素推進課 山本氏)、および断熱技術の推進を活用した脱炭素に向けての施策の現状と課題 (住宅政策課 榎原氏) を調査した。また「えねみら・とっとり (エネルギーの未来を考える会)」の代表山中幸子、手塚智子両氏に自然エネルギー推進事業についてインタビュー調査を行った。手塚氏は「市民エネルギーとっとり」代表でもあるため、同団体の発電事業について発電所を訪問し、事業展開についての経緯および課題について調査した。

- ・神奈川県小田原市、松田町調査 (2025 年 3 月 15 日)

空閑が神奈川県小田原市および松田町を訪問し、ソーラーシェアリングおよびバイオマスエネルギー活用事業を実施している「かなごてファーム」代表小山田大和氏より、事業の沿革、現状、課題についてうかがった。

●関礼子

- ・福島県檜枝岐村 (2024 年 8 月 4 日~7 日)

4 日は檜枝岐村が主催する「真夏の雪まつり」、村の水環境・水資源調査 (水小屋、水路、水力発電所跡)。5 日に上田による「檜枝岐を考えるワークショップ」(午前)、上田と関による「哲学対話」(午後)、6 日には奇二による「自然体験教室 (1)」(午前)、「自然体験教室 (2)」(午後) を実施。

●阿部治

- ・宮城県大崎市 (2024 年 7 月 5 日~6 日)

大崎市にて 7 月 5 日に開催された「蕪栗沼・周辺水田」ラムサール条約登録 20 周年イベントに参加し、シジュウカラガンの回復並びに冬水田んぼの提唱・定着を主導してきた同地域における環境教育/ESD からの到達点を知ると共にパネルディスカッションの座長としての任を果たす。

- ・山形県鶴岡市 (2024 年 8 月 23 日~26 日)

河村と共にユネスコ食文化創造都市である鶴岡市を訪問し、同取り組みにおける SDGs 並びに ESD について市役所担当者らへの聞き取りを行う共に風力発電施設の視察及び設置の問題点について市議員らからの聞き取りを行った。阿部単独では、同市のラムサール条約登録湿地上池・下池と隣接する同市自然学習交流館「ほとりあ」を訪問し、現地視察と同市における環境教育/ESD について聞き取りを行った。

- ・東京都青ヶ島村 (2024 年 10 月 4 日~6 日)

ESD を学校目標に掲げている青ヶ島村における環境教育/ESD の取り組みについて教員への聞き取りを行った。

- ・台湾高雄市 (2024 年 10 月 17 日~21 日)

高雄市において開催された台湾環境教育学会 (18 日~21 日) にコメンテーターとして参加した。

- ・福島県只見町 (2024 年 11 月 14 日~15 日)

只見町にて 14・15 日に開催された東北 ESD/SDGs フォーラム 2024 (只見町・東北地方 ESD 活動支援センター等主催) に参加し、只見町をはじめとする東北地域における ESD の取り組みに関する情報収集を行うとともに関係者とのネットワークを構築した。

- ・愛媛県新居浜市 (2025 年 2 月 9 日~10 日)

新居浜市にて開催された四国 ESD フォーラム 2024 (新居浜市・環境省・四国 ESD 活動支援センター主催) に参加し、同市並びに四国地域における ESD の情報収集を行った。

- ・長崎県対馬市 (2024 年 12 月 21 日~23 日) ⇒河村と同じ

●上田信

- ・西伊豆町・松崎町・三島市 (2024 年 5 月 1 日~2 日) ⇒河村と同じ

・高知県梶原町（2024年7月21～23日）

梶原町の林業を軸にした地域づくりについての調査。役場の立道氏、林業に取り組む KIRe カブの下村氏・長谷川氏。隈研吾氏設計の役場庁舎を見学した後に会議室で梶原の取り組みについて説明を受ける。ヒノキ・広葉樹の圃場、伐採現場の視察。

・北海道羅臼町（2024年7月30日～8月1日）

小林潤司氏（環境学部設置準備室・教授）ならびに空閑とともに、羅臼町が毎年開催している「ふるさと少年探検隊」に関する調査。31日に役場にて、町をあげて取り組んでいるこの企画について、歴史や背景について聞き取り調査を実施。7月29日にベースキャンプを訪問し、子どもたちの主体的な取り組みと、野外学習の状況を視察した。

・福島県檜枝岐村（2024年8月4日～7日）

4日には関とともに、檜枝岐村が主催する「真夏の雪まつり」を視察し、豪雪地である点を逆手に取った取り組みについて、地域創生の視点から視察。村の環境を「水」の視点から調査。5日に地元住民を交えたワークショップを行い、ブレインストーミング、哲学対話、KJ法などの手法を用いて、地域の魅力の再発見と将来ビジョンのイメージづくりを行う。6日には奇二が合流して、その指導のもとで地域の大人と子どもたちと自然観察会を、それぞれ別実施。自然の多様性という地域の「宝」を、住民とともに発見する。

・埼玉県小川町（2024年11月30日）

NPO 法人小川町風土活用センター主催の「里山ぐるぐるツアー」に参加し、カーボンニュートラルに向けた地域の取り組みなどを視察。

・大阪市（2024年12月7日）

認定 NPO「緑の地球ネットワーク」運営懇談会に参加し、梶原町でのフィールドワークで ESD 研究所との連携の可能性について、提案し協議を行う。

●河村賢治

・西伊豆町・松崎町・三島市（2024年5月1日～2日）

上田・河村および ESD 研究所研究員である中口が、ESD 研究所連携地域である西伊豆町と松崎町を訪問し、町役場関係者と今後の連携の在り方などについて話し合いを行った。また、地域における循環経済を実践している方々とお会いし、地域循環の一端としての炭焼きも実際に経験した。その後、三島市に移動し、NPO 法人グラウンドワーク三島の渡辺氏の案内のもと、源兵衛川などを視察し、「水の都・三島」の原風景再生の道筋を学んだ。

・土庄町（小豆島・豊島。2024年8月20日～22日、11月2日～3日）

上田・河村が、小豆島・豊島をフィールドにして地域の方々の協力のもと地域創生の学びの場を設けるべく、8月に土庄町を訪問し、町役場関係者や地元企業関係者などと打ち合わせを実施した。河村は、豊島の産業廃棄物問題を取り扱った豊島こころ資料館や豊島の自然を活かした豊島美術館なども訪問し、産業廃棄物の島からアートの島への移り変わりや地域住民の思いなどについて関係者から話をお聞きした。11月には、上田・河村が、立教セカンドステージ大学受講生とともに、小豆島フィールドスタディを実施した。多くの受講生を受け入れてくださった地域の方々に心より感謝したい。

・鶴岡市（2024年8月25日～26日）

阿部・河村が、鶴岡市を訪問し、地元関係者の案内のもと、風力発電の現場を視察し、その現状と課題についてヒアリングを行った。また、鶴岡市役所を訪問し、脱炭素を含めた ESD の取り組みのほか、ユネスコ食文化創造都市としての取り組み（食文化を通じた地域創生など）について話をお聞きした。

・対馬市（2024年12月21日～22日）

阿部・河村が、ESD 研究所連携地域である対馬市を訪問し、対馬市主催の対馬学フォーラムに参加した。対馬学フォーラムは、対馬における研究・実践活動に取り組む市民・学生・大学関係者や研究者等が一堂に集い、その成果を発表し相互交流を行うとともに、対馬の地域社会へ広く研究成果を発信するためのイベントである。学びと地域創生を結び付けるイベントであり、ESD 研究所として注目すべきものと考えている。

第2の研究活動

●ESD 研究所公開イベント「ESD×SDGs 自治体会議 2024」(2024年11月15日～16日)

ESD 研究所は地域創生拠点事業を進めるなかで、これまで羅臼町(北海道)・檜枝岐村(福島県)・西伊豆町(静岡県)・松崎町(静岡県)・飯田市(長野県)・対馬市(長崎県)と覚書を交わし、連携を深めてきた。こうした地域と交流する中で、各自治体が共通する課題に取り組んでいることが明らかとなった。今回の「自治体会議」では、各自治体の関係者に参加を呼びかけ、これまでの経験をファシリテーターのもとで紹介しあい、地域創生への取り組みを相互に学び、さらに今後の展望を拓くことを狙いとした。イベントのスケジュールは以下のとおり。

15日(金)

13:30～14:50 ①河村賢治 「海のESD」

15:00～16:20 ②関礼子 「観光と災害リスク」

16:30～18:00 ③奇二正彦 「ネイチャーポジティブと観光」

16日(土)

13:30～14:50 ④空閑厚樹 「エネルギーの地域自給」

15:00～16:20 ⑤上田信 「地元学の成果と課題」

16:30～18:00 ⑥総合討論

例えば、④空閑厚樹「エネルギーの地域自給」のセッションでは、エネルギーの地域自給をテーマに実践報告と議論が行われた。地域に根ざした分散型のエネルギー自給(地域ごとに小規模な発電設備を配置するシステム)を進めることは、温暖化対策として重要な一歩となると考えられている。現在の垂直統合型エネルギー体制(生産から消費までを中央集権的に管理するシステム)から脱却するためには、技術的な進展だけでは不十分である。社会の仕組み自体の転換も必要とされている。特に重要なのは、エネルギーの利用者が単なる消費者から当事者へと変わり、自分事として関わることである。この変化を促進するためには、自主的な学びの機会が重要な役割を果たす。本セッションでは、以下の先進的な取り組みについて報告があった。1)市民がたちあげた小川町自然エネルギーファームによる地域資源を活用したエネルギー生産、2)ESD 研究所主催の勉強会から生まれた小川町の地域電力会社(ODEN)の展開、3)立教大学も電力調達先とする秩父新電力の地域貢献型経営モデル、4)秩父市が推進するエネルギー自給と脱炭素への統合的アプローチ。報告の後、報告者間でディスカッションを行った。

なお、他のセッションを含め、本イベントの内容については、別途、報告書を作成中である。

●SFR メンバーによる研究会(2025年1月23日、2025年2月4日)

1月の研究会では、本プロジェクトに関連する各自の活動(上記「第1の研究活動」参照)の共有や、「ESD×SDGs 自治体会議 2024」の振り返りなどを行った。例えば、「ESD×SDGs 自治体会議 2024」において、セッション①「海のESD」を担当した河村からは、対馬市・羅臼町・豊島区における海のESDに関する取り組みの報告を受け、オーシャン・ブライندネスなどの共通課題がある中で、それぞれの地域の特徴を活かしながら様々なESDが展開されていることが確認できたこと、相互に学びあうことで新たな気付きや一層有効なプログラムの開発につながりうること、現在、対馬市と奈良県生駒市が海洋プラスチックごみなどに関する教育プログラムの開発を進めており、ESD 研究所としてもこれに協力していくことなどの報告が行われた。

2月の研究会では、地域創生指標に関する検討を行った。まずは既存の代表的な地域創生および幸せな暮らしに関する指標の例として、「ローカルSDGsプラットフォーム」(SDGsに積極的に取り組む自治体やその関係者を支援するプラットフォームであり、自治体におけるSDGs達成に向けた取組状況を様々な統計情報からスコア化して可視化するもの)と、「地域幸福度(Well-Being)指標」(それぞれの地域における市民の暮らしやすさと幸福感(Well-being)を数値化・可視化するもの)を取り上げ、その現状と課題について討議した。具体的には、ESD 研究所連携地域における「ローカルSDGsプラットフォーム」および「地域幸福度(Well-Being)指標」の結果を確認し、その結果には理解できる部分もあるが疑問が残る部分もあることや、そうした結果を導き出す項目やデータに不十分な点があるのではないかという問題提起が行われた。その後、メンバー間で積極的な議論が行われ、本プロジェクトとしては、新国富指標などの他の指標や指標間の相互関係も確認してみること、コミュニティにおける学びの側面を重視すること、指標ではとらえきれない要素を見落とすことなく検討を進めていくことの重要性などが確認された。現時点で、9つの自治体の総合計画をまとめ、分析の基礎資料とすることができているので、これをもとに研究を進めていく所存である。

※この(様式2)に記入の【経過・成果】の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

● 関礼子、奇二正彦、空閑厚樹、上田信、河村賢治

③ ESD 研究所公開イベント「ESD×SDGs 自治体会議 2024」、2024 年 11 月 15 日～16 日、立教大学

● 河野哲也

④ ワークショップ: 「哲学対話ファシリテーション講座」、主催: 池田記念美術館、2024 年 4 月 28 日、於: 池田記念美術館。

④ 研究発表: 「多世代地域コミュニティ形成のための哲学対話の実践報告: 気仙沼市における 3 つの事例を通して」発表代表者: 田口空一郎 (立教大学 ESD 研究所研究員)、共同発表者: 石渡美恵子 (立教大学)、得居千照 (静岡福祉大学)、河野哲也 (立教大学)、日本哲学プラクティス学会第 5 回大会、2024 年 9 月 29 日、於: 長野県立大学。

④ 招待講演: 「環境倫理と哲学対話による地方創生」令和六年度としまコミュニティ大学一般公開講座、2024 年 12 月 14 日、於: 立教大学池袋キャンパス。

④ コーディネーター・コメントーター: 第 2 部アクションを生み出していくためのアプローチ「科学だけでは生み出せない理解と共感」(豊田光世, Rachel Sweeney, 井上大輔, 河野哲也)、日本学術会議公開シンポジウム: 多世代・多分野交流による環境・SDGs 教育会議「環境問題に関心のない人をどのように巻き込んでいくか?」、2025 年 3 月 8 日、京都里山 SDGs ラボ「ことす」+オンライン。

● 橋本俊哉

④ 講演: 「復興のエンジン」としての観光、240918、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院「災害からの復興と観光ー歴史的環境と智慧の継承」研究会

④ 研究紹介: 「復興のエンジン」としての観光ー「自然災害に強い観光地」の条件とは、一般社団法人日本私立大学連盟「加盟大学防災・減災事例集」2024, p51

④ 研究報告: 災害復興における「観光の力」、241207、日本観光研究学会第 39 回研究ワークショップ、大阪成蹊大学

④ 学生ポスター発表: 多様な人々を魅了する宮古の「歴史」と「ジオのつながり」ーエコウォークツアーの改善・チラシ作成を通して、241214、第 14 回全国エコツーリズム学生シンポジウム、立教大学

④ 学生発表: 桧原・裏磐梯地区の振興に向けた課題ー土産品の改善を中心として、250309、第 18 回裏磐梯ビジターセンター研究発表会

● 奇二正彦

④ 招待講演: 日本学術会議公開シンポジウム: 多世代・多分野交流による環境・SDGs 教育会議「環境問題に関心のない人をどのように巻き込んでいくか?」、2024 年 3 月 8 日、京都里山 SDGs ラボ「ことす」+オンライン。

● 空閑厚樹

① 「持続可能であることー「契約」と「宣教」を通じた「あるべき関係」の追求ー」、『富坂キリスト教センター紀要』、15 号、2025 年、73-84 ページ

● 関礼子

④ 招待講演: 日本学術会議公開シンポジウム: 多世代・多分野交流による環境・SDGs 教育会議「環境問題に関心のない人をどのように巻き込んでいくか?」、2024 年 3 月 8 日、京都里山 SDGs ラボ「ことす」+オンライン。